

平成25年度 兵庫県立こぼと聴覚特別支援学校 各部重点目標

学校経営の重点

- (ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。
- (イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う。
- (ウ) 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい育児が行えるよう、保護者の支援を行う。
- (エ) 聴覚学習を通して個に応じた聴覚の活用を促すとともに、視覚情報を効果的に取り入れてコミュニケーション活動を活発にし、基礎的な言語の獲得を進める。
- (オ) 豊かな生活体験を通して基本的生活習慣の確立をはかり、障害に基づく困難の改善と克服および自立を目指す人間性の素地を培う。
- (カ) 地域におけるセンター的機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。

自己評価基準 A 達成している ■ B おおむね達成している ■ C あまり達成していない ■ D 達成していない ■

学部・分掌	(学校経営の重点) 各部の今年度重点目標と結果・課題			
	具体的取り組み	結果と課題(改善方策)	各部評価	全体評価
保育相談部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。		B	
	幼児の聴力や生活の中での音反応を把握し、あそびの中で聴覚活用を促す指導に取り組む。	どのように音をきかせるか保護者に伝えたり、聴力に合わせた音源で音あそびをすることで、子どもが音を待つ姿勢を身につけるようになった。聴覚活用の状況に応じて、音声言語以外のコミュニケーション手段を広げる指導が今後も必要である。		
	(ウ) 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい育児が行えるよう、保護者の支援を行う。		A	
幼稚園部	(ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。		B	
	各教室において、小動物や季節の植物及びおもちゃ等の配置を工夫し、子どもたちが自分から積極的に遊ぶことができる保育環境を整備する。	小動物や植物及び季節に関する掲示等についての整備は進めることができた。しかし、教室のおもちゃの配置については、子どもが使いやすい形にするための工夫がもう少し必要であったと考える。また、おもちゃで遊ぶ時間を十分持つことができなかったことも反省点である。		
	朝の歌、なかよしあそび、絵本の読み聞かせや秋祭りに向けての神輿づくりなど、異年齢保育を充実させ、学年を超えた人間関係づくりをはかる。	お店屋さんごっこを通して学年を超えた交流ができた。またなかよし給食では、普段より早く食べ終わる子どもが増えるなど、お互いに刺激しあう成果があった。また、年長の子どもが年少の子どもを思いやる場面も多くみられた。しかし、行事との関係でなかよしあそびの時間があまり確保できなかった。発達課題別小集団のグループ保育の時間を確保することができた。それによりコミュニケーション力の育ちも見られた。保育についての意図や課題の提示について保護者に説明する時間がもう少し持てるようになった。		
相談センター部	(ウ) 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい育児が行えるよう、保護者の支援を行う。		B	
	個別懇談、個別指導の後以外にも、保護者の希望に応じて懇談の時間を設定する。また保護者のニーズを理解しながら、子どもの発達課題を具体的に伝える。	保護者との懇談の時間を設定したり、子どもの発達課題を具体的に提示するように心がけていた。しかし保護者のニーズを聞いて、子どもへの課題を伝える時間がもう少し確保できればよかったとの反省もある。		
相談センター部	(カ) 地域におけるセンター的機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。		B	
	阪神地域の特別支援学校との連携を図り、情報交換、本校教育の理解・啓発、教育相談利用の重複障害児への支援を充実させる。	昨年度末に近隣3校(尼崎・阪神)との連携会議を立ちあげ、今年度より学期に1回「3校連携会議」を実施していくこととなった。成果として、各校の取組や尼崎市教委・福祉・巡回相談等の情報交換、重複障害児等への支援や就学に関する連携、各校が実施する研修会の紹介、療育機関との連携等ができた。課題として、他の支援学校等との連携の構築が課題である。		
教務部	(イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う。		B	
	個別の教育支援計画を充実させる。前回の見直しから3年が経過したため、関係する分掌等と連携し様式の見直しをする。	各学部教務部内で検討を行った。担任が記入する様式に変更点はない。入学対象児の資料と支援計画の基礎情報をリンクさせ、事務処理手続きの軽減を行った。また次年度より学級毎であったファイルを個別のファイルに整理することとし、活用しやすいように改善することとなった。		
	(カ) 地域におけるセンター的機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。		B	
教務部	ホームページの教務関係の内容を充実させる。本校の教育内容や在籍児の様子をより理解しやすいようにする。	教育相談利用者、他校の教職員、学生等様々な立場の方々からホームページを見て活用されていることを踏まえ、学校案内の欄を現状に即した文言に替え、幼児の活動の様子がわかる写真を付け加えた。また各学部のホームページ担当者や連携し、学部のページの更新も行ってもらった。	B	

研究部	(イ) 幼児の発達と聴覚障害の特性に配慮しながら個性と能力の伸長を目指すとともに、一人一人のニーズに応じた教育を行う。				
	平成26年度の全日豊に向けて、幼稚部・保育相談部それぞれの研究をまとめる。週1回、各部署で研究活動を行い、現在の子どもの実態に応じた教育を考える。	研究授業を実施したり、授業をビデオに撮り授業分析を行ったり、子どもの実態に応じた教育の実践を行うことができた。保育相談部では、母子遊びや絵本の読み聞かせを通して母親への具体的支援を行い、幼稚部では外部講師を招聘しての授業研究会で「考える力を育てるための話し合い活動」をテーマに指導力の向上を目指した。教師の指導力は徐々に高まっていると感じる。平成26年度の全日豊に向けて研究をすすめているが、まだまとめる段階には入っていない。	B		
	教員の指導力の向上を図るため、今年度も全教員が研究授業を行う。授業を自己評価・他者評価し改善していくことで、子どもが生き生きと主体的に参加する授業を目指す。		A		
	(ウ) 愛情に満ちた親子関係の中で望ましい保育が行えるよう、保護者の支援を行う。				
保護者がわが子に向き合い、将来を見据えた上で、現在の子どもの発達特性に見合った関わりができるよう、保護者のニーズに応じた研修を企画・実施する。	予定していた研修はすべて実施した。保護者のニーズには合っていた。研修した内容を即座に子どもへの対応に反映出来たわけではないが、保護者の考えを整理したり、前向きな気持ちにつなげたりすることはできたと思われる。先輩の母親や成人聴覚障害者などの話など、将来を見据えることのできる研修内容が必要と考える。	B			
(ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。					
生活部	季節感を感じられるような環境構成を整え、子どもたちが主体的に参加できるように行事を計画し、すすめる。	季節感を感じられるような環境構成を適切に行い、クリスマスツリーの飾り付けを年長組がしたり、桃の花の水替えをクラスごとでしたりと、子どもたちが関われるようにした。今後も様々な行事に対して、子どもたちがさらに主体的に参加できるよう工夫していく必要がある。	B		
	各クラスに花壇と畑を割り当てる。年間を通じて栽培計画を立て、子どもたちが主体的に自然と触れ合う機会をつくる。	各クラスに畑・花壇を割り当て、季節や旬を感じられる植物を育てることを計画し、苗を植えること・種まきから収穫まで子どもたちが関わることができるようにした。子どもたちが登下校時よく見る花壇については、種類を増やすなどしてさらに充実させる必要がある。	B		
	舞子高校との交流教育としての防災教育や避難訓練、職員対象の不審者対応訓練を実施し、命の大切さや安全に対する意識を高める。	<ul style="list-style-type: none"> 舞子高校との交流教育を通して子どもたちが、防災について身近に考える機会となった。来年度は内容を変え、より充実した防災教育を行っていきたい。 避難訓練は火災・地震の訓練をおこなった。火災訓練は消防署と連携して行なった。地震訓練は映像を交えた地震のお話で地震や津波についての理解を深めることができた。 不審者対応訓練は、具体的な設定をして役割分担を決めて行った。その結果、玄関が無防備であることに気づき、通用門の施錠や門扉の開閉方法等の改善を行い防犯上の安全性を高めることができた。 	B		
	(オ) 豊かな生活体験を通して基本的生活習慣の確立をはかり、障害に基づく困難の改善と克服および自立を目指す人間性の素地を培う。				
	給食を通して食に関する基礎的な知識を高め望ましい食習慣が身に付くよう、季節や栄養バランス、子どもたちの嗜好に配慮した給食献立の充実を図る。	季節や行事を意識した献立作成を行ったことで、子どもたちが季節の食べ物を知ったり、メニューについて話をすることができた。今後も望ましい食習慣が身に付く献立等の工夫が必要である。	A		
	子どもたちが主体となる食体験を充実させ、食への関心を高め、食べる楽しさを知る機会をつくる。	もちつき等の体験活動を計画的に実施することができた。今後は、より安全・安心な活動ができるように見直し・改善をする必要がある。	B		
(ア) 聴覚に障害のある幼児の全人的発達を促すための教育的支援を行う。					
情報部	毎月2回(水曜日の午後)、ボランティアの方と教師で絵本の読み聞かせを開催する。	読み聞かせの日をボランティアの方と事前に打ち合わせ、月に2回ずつしっかりとることができた。参加する子どもの人数も比較的多く、親子共に絵本を楽しめる会となっていた。また読み聞かせのあと、図書室を利用する姿も多くみられ、絵本に親しむ良ききっかけとなっていた。	A		
	図書室をより利用しやすくするために本棚を整理し、入口の絵本ラックには月ごとに季節の絵本を選んで置き、各月のおすすめの本が分かりやすいようにする。	こまめに図書室の整理整頓を行った。また月の始めや行事前には絵本ラックの中の絵本を入れ替え、行事や季節をより意識できるよう絵本の配置を考えた。また今年度は季節の絵本を多く購入してもらえたため、新着図書を紹介し、子どもたちが喜んで絵本を借りる様子が見られた。	A		
	(カ) 地域におけるセンター的機能と聴覚障害児教育への理解・啓発を図るとともに、開かれた学校づくりを推進する。				
昨年度はホームページのデザインを一新したので、今年度は、本校をもっと外部にアピールできるように、校長からのメッセージを掲載したり、子どもたちの保育の様子をより具体的に紹介する等、記事の内容を充実させていく。	「校長室から」のコーナーを新設し、校長からのメッセージを掲載した。給食紹介のページは写真のサイズを大きくし、見やすくなった。また、各部の紹介や学校紹介のページ等も内容を検討し、少しずつ修正している。来年度は、写真等をさらに有効に使い、見やすいホームページにしていきたいと考えている。	B			